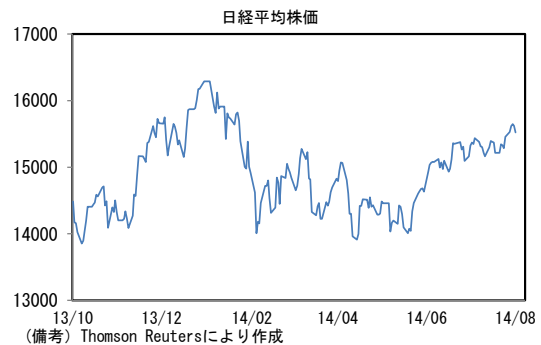
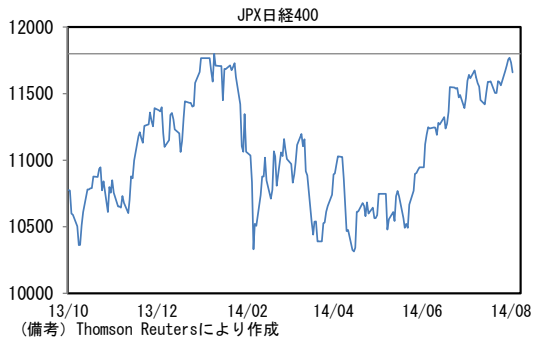
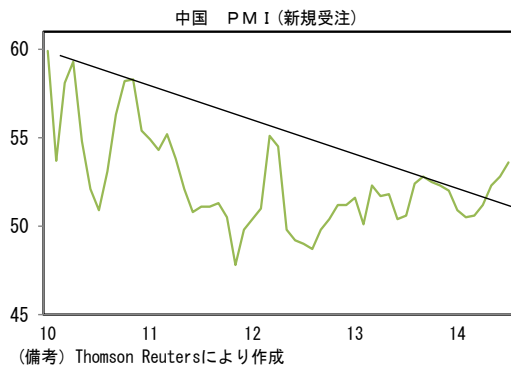
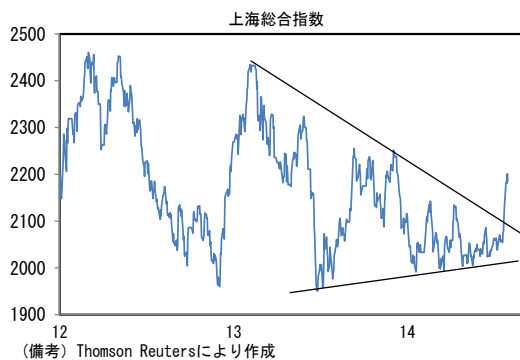
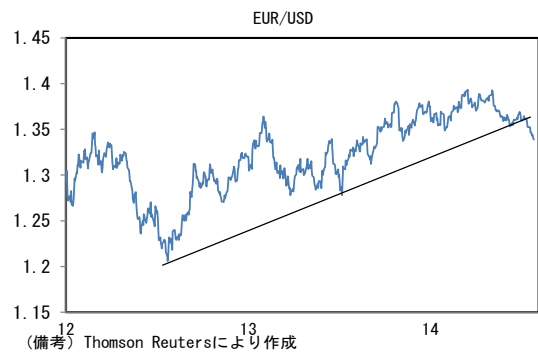
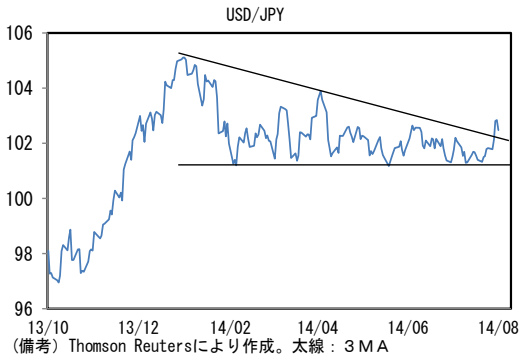
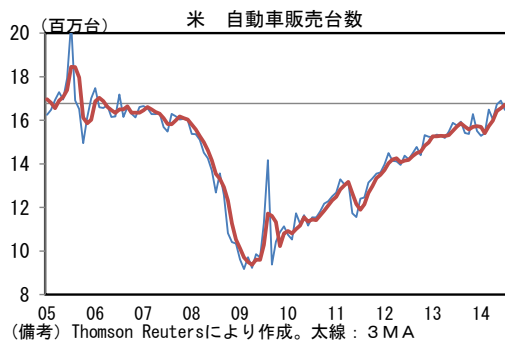
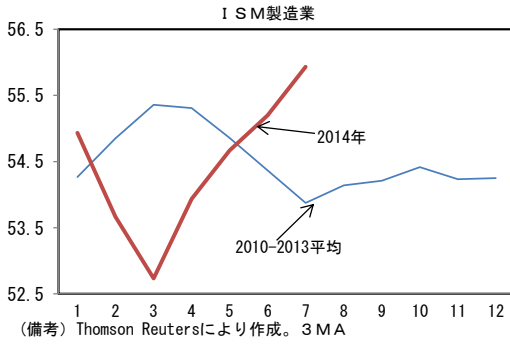
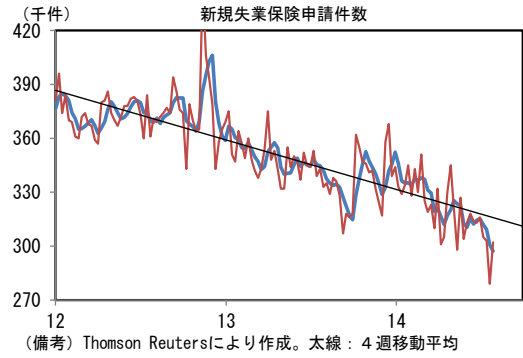


7月雇用統計はNFP増加数が20.9万人と市場予想(23.0万人)を下回り、平均賃金にも加速感がみられなかったため、投資家にとってやや物足りない結果となった。市場は米株下落、米金利低下、ドル売りで反応。しかしながら、NFPが6ヶ月連続で20万人超を達成しているうえ、それを映じるように他の経済指標が好調を維持していることを勘案すれば、米経済の力強さは疑いようがなく、株価下落、金利低下が長期化するとは考えにくい。筆者は、7月雇用統計に加速感がみられなかったことよりも、新規失業保険申請件数の4週移動平均が遂に30万件を割れたことを重視する。強気ポジションを手仕舞う必要はないだろう。

同日発表の7月ISM製造業景況指数はヘッドラインが57.1と非常に強かったばかりか内訳も良好。例年、同指標は夏場に落ち込む傾向が強かったが、今年はまだ夏だというのに、非常に力強い。これは寒波によって短期的な景気サイクルに変化が生じたことも一因だが、本質的には米経済の自律成長を反映したものと考えられることができる。特殊要因(天候、地政学リスク)がなければ自然体でも景況感が上向くのだろう。7月は生産(60.0→61.2)が異例の高水準から一段と上昇、新規受注(58.9→63.4)が著しく伸び、雇用(52.8→58.2)も2011年6月以来の高水準を記録。一方、在庫(53.0→48.5)は急激に減少し、先行きの在庫復元を示唆。入荷遅延(51.9→54.1)の押し上げ寄与からは製造業活動が活況を呈している様子が窺える。“お見事”な仕上りだ。なかでも米景気の先行指標として有効な新規受注の加速は米経済拡大をカタリストに日米株上昇、USD/JPY上昇、EUR/USD下落を見込む向きにとって朗報となったに違いない。

また、7月自動車販売台数(SAAR)は1648万台と出来過ぎの印象さえあった前月(1698万台)からはさすがに減少したものの、それでも3MAで見れば増加を維持。この間の好調な自動車販売が寒波からのペントアップデマンドだけで説明できないことを示している。企業収益にポジティブな裁量的支出の伸びは、企業の価格決定力回復を通じてインフレ率を押し上げる要因となるだろう。つまるところ、USD/JPY上昇、EUR/USD下落シナリオの前提にある米経済加速は順調に進捗しているということだ。

そうしたなか、為替市場で僅かではあるが、USD買いの勢いが強まる兆しがでてきた。USD/JPYとEUR/USDは共にトレンドラインをブレイクし、それぞれ筆者予想(USD/JPY115、EUR/USD1.28)に向けて動きだした。その他では上海総合指数が長らく続いた三角持合をブレイクし、年初来高値圏で推移。過去数ヶ月のPMI改善を映じた動きと言えよう。このことは新興国の復活を強く意識させ、先進国株の追い風となろう。上海からの追い風もあり、日本株はJPX日経400が年初来高値を射程距離に入れたほか、日経平均も15500レベルで底堅く推移している。欧米株の調整は短期間で終了することが見込まれるため、海外市場からの逆風が止んだ後に日本株はサマーラリーを再開するだろう。以下に強気チャートを掲載した。



本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。